

(17) セルリー

主要病害虫別防除方法

農薬による防除については、栽培ステージ、病害虫の発生状況等に応じて、散布、灌注、土壌消毒などを行う。

なお、農薬による防除の際は、農薬登録内容や使用上の注意等を遵守して実施する。

(農林水産省農薬登録情報提供システム <https://pesticide.maff.go.jp/>)

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
軟腐病 (細菌)	①イネ科またはマメ科植物との3～4年の輪作をする。 ②多湿条件で発病が助長されるので、地表面はマルチする。 ③密植や窒素肥料の過用を避ける。 ④トンネルや、ハウスを利用した雨よけ、風よけ栽培を行う。 ⑤ハウス栽培では、日中の換気に注意するとともに、通路などに敷わらをして土壌の飛散を防ぐ。 【参考事項】 アブラナ科やナス科など多数の作物を侵す。 侵入部位は、主に作業時にできた傷や、昆虫の食害による傷である。 栽培終了後は、被害組織とともに土中に残り、次作の伝染源となる。 生育適温は30～35℃と高く、多湿条件下でよく増殖する。 伝染は主に水を介して行われる。降雨による土壌の飛散にともなって、地上部の茎葉に病原菌が運ばれ、また病斑部から飛散した水滴の一部は、強風下でエアゾルとなって病原菌を運ぶ。 主に露地栽培での発生が多く、夏から秋にかけての長雨、台風により多発することが多い。秋が暖かい年は発生の多い傾向がある。
葉枯病 (<i>Septoria</i>)	①種子伝染防止のため、48℃、30分間の温湯消毒をする。(野菜の種子消毒の項参照) ②排水を良好にする。 ③発病茎葉を処分する。 ④連作を避ける。 ⑤ハウスやトンネルにより雨よけ栽培をする。 【参考事項】 菌糸または柄子殻(柄孢子)のまま、被害植物、とくに種子で越冬する。 柄子殻から溢出した柄孢子は、適温、多湿条件下で発芽し、感染、発病する。 生育適温は16～21℃で、死滅温度は48～49℃である。 病斑部には、古くなると中心部に小黒点状の柄子殻ができる。柄子殻は成熟して雨水に遭うと、頂上部の小孔から柄孢子を盛んに放出して、二次伝染が起こる。 露地栽培では、降雨によって柄孢子が飛散し激しく発病する。
斑点病 (<i>Cercospora</i>)	①種子伝染防止のため、48℃、30分間の温湯消毒を行う。(野菜の種子消毒の項参照) ②窒素肥料の過用を避ける。 ③被害植物残さがほ場に残らないように除去する。 ④連作を避け、2～3年は他の作物を栽培する。 ⑤ハウスやトンネルにより雨よけ栽培をする。 【参考事項】 ミツバ、パセリも侵す。 菌糸塊により、種子または被害植物について越冬し、第一次伝染源となる。 病斑上には、分生孢子のみを形成し、高温多湿条件下では、表面に白いカビとして見える。雨水により分生孢子が脱落して、二次伝染する。 トンネルやハウスによる雨よけ栽培では、雨滴の飛散がほとんどなく、発生は少ない。 露地栽培では、降雨が続くと分生孢子の飛散によって激しく発病する。
萎黄病 (<i>Fusarium</i>)	①連作を避ける。 ②育苗は無病土を用い、育苗箱、プラグ、鉢などで行う。育苗中はこれらが地面に接しないよう、すのこなどの上で管理する。 ③太陽熱又は蒸気で土壌消毒を行う。 ④暑い時期の栽培を避ける ⑤発病株の残さは、ほ場から持ち出し処分する。 【参考事項】 病原菌は、厚壁孢子の形で被害植物または土壌中で長期間生存し、土壌伝染する。 発病適温は27～30℃である。 地際付近が崩壊し腐敗する場合もあるが、軟腐病のような悪臭はなく、乾腐状を呈する。

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除
アブラムシ類	①施設の開口部は目合い1mm以下の防虫ネットを展張する。 ②ほ場周辺の雑草の除去、寄主となる作物の防除を行う。 【参考事項】 モモアカアブラムシ、ニンジンアブラムシ、ワタアブラムシなどが寄生する。 アブラムシ類はモザイク病を媒介する。
ハモグリバエ類	①施設の開口部は、目合い0.8mm以下の防虫ネットを展張する。 ②ほ場周辺の雑草の除去、寄主となる作物の防除を行う。 ③ほ場全体をビニルで覆い、太陽熱で地上の蛹を殺してから定植する。 【参考事項】 ナモグリバエとマメハモグリバエの寄生が多い。このうち、マメハモグリバエはセリ科をはじめ、キク科、マメ科、ナス科、アブラナ科、ウリ科など多くの植物に寄生する。 幼虫は、3齢を経て蛹化直前に葉外に脱出し、土壌表面などで蛹化する。 産卵から成虫羽化まで、25℃では約17日である。 施設では年中発生し、休眠はしない。
ヨトウガ (ヨトウムシ)	①管理作業中に卵塊や幼虫集団を見つけたら捕殺する。 ②施設の開口部には、目合い4mm以下の防虫ネットを展張する。 【参考事項】 キャベツ、ハクサイ、ダイコン、花きなど多くの作物を加害する。 発生は年2回、6～7月と8～9月に発生が多い。 ふ化幼虫、若齢幼虫は葉裏に群生して加害する。被害部がスカシ状になるため、容易に発見できる。 終齢幼虫は日中地際部に潜み、夜間出てきて葉を食害し、土中で蛹化する
ハスモンヨトウ	①管理作業中に卵塊や幼虫集団を見つけたら捕殺する。 ②施設の開口部には、目合い4mm以下の防虫ネットを展張する。 【参考事項】 ダイズ、キャベツ、ハクサイ、ダイコン、花きなど多くの作物を加害する。 発生は年数回で8月頃から増え始め、9～10月は特に多い。 ふ化幼虫、若齢幼虫は葉裏に群生して加害する。被害部がスカシ状になるため、容易に発見できる。 終齢幼虫は日中は地際部に潜み、夜間出てきて葉を食害し、土中で蛹化する。